

九州工業大学学術機関リポジトリ



Title	状況判断に関わる認知的トレーニング法の構築 - ラグビーフットボールを対象として -
Author(s)	下園, 博信
Issue Date	2014-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10228/5253
Rights	

氏 名	下園 博信(鹿児島県)		
学 位 の 種 類	博 士(学術)		
学 位 記 番 号	生工博甲第223号		
学位授与の日付	平成26年3月25日		
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	状況判断に関わる認知的トレーニング法の構築 ーラグビーフットボールを対象としてー		
論文審査委員会	委員長	教 授	古川 徹生
		教 授	栗生 修司
		教 授	森江 隆
		教 授	夏目 季代久
		教 授	石井 和男

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、ボールゲームの状況判断をトレーニングする認知的トレーニング法を対象としている。その認知的トレーニング法の課題として、1) トレーニングの方法が統一されておらず、共通したトレーニングのモデル化ができていない。2) トレーニングの効果が状況判断のどの部分に該当しているか明確でない。3) トレーニングの評価をパフォーマンスによって求めていることが多く、認知的トレーニング法に関わる認知の内容を評価していない。本研究ではこれらの課題を解決することで、状況判断に効果的な認知的トレーニング法の構築を行うことを目的とした。

第1章では、状況判断についての説明や、スポーツと状況判断の関わり、認知的トレーニング法の研究の概要、知識構造との関係などを踏まえて、本研究の目的を述べた。

第2章では、認知的トレーニング法の対象が手続き的知識になることや、状況判断の正確性に効果的であることを提示した。さらに認知的トレーニング法の準備、実施方法、評価法までを明確にし、効率的な認知的トレーニング法の構成と過程を示した。認知的トレーニング法の評価に関わる状況判断の測定と評価法については、評価の基本的枠組みを設けて、言語化させ、得点化することによって測定と評価を行えるようにした。

第3章は、第2章で構築した認知的トレーニング法を用い研究を実施した。ゲーム状況の決定的場面における状況判断について、積極的に考え言語化し、それについて適切な解説が加えられた認知的トレーニング法が効果的であることを立証できた。

第4章では、状況判断とスキル水準の関係に着目し、前章で提示・検証した従来型の状況判断のテストと、速く解答することを課題とした時間型の状況判断のテストを行い比較した。また、状況判断に関わる自己効力感について検討した。結果は、従来型と時間型の状況判断のテストでは、得点に差は見られなかった。しかし、スキル水準別では非レギュラーグループの時間型テストの得点が有意に

低く、時間的な猶予がなくなったときに正確な情報を察知できなくなっていた。さらに、状況判断に対する自己効力感と、状況判断したプレーの遂行に対する自己効力感について比較した結果、準レギュラーグループと非レギュラーグループについて、状況判断したプレーの遂行に対する自己効力感が有意に低くなった。2つのグループは、判断には自信を持っているが、そのプレーを遂行できる自信はない。以上のことが明らかとなった。

第5章では、認知的トレーニング法の応用について、競技未経験者と授業を題材に検討した。結果は、未経験者の状況判断は、授業後に有意に向上した。特に、ラグビー未経験者の「防御の状況」が向上した。経験者は、状況判断全体の変化はみられなかったが、「選択すべき個人のテクニック」が向上した。さらに、授業後の状況判断テストと宣言的知識のテストには有意な相関が見られた。また、状況判断テストの得点変化率と理解度については、経験者、未経験者ともに得点変化率の高い方が、理解度も有意に高い結果となった、以上のことが示された。

本研究では、ボールゲームの競技状況における状況判断に着目し、認知的トレーニング法を開発した。そのトレーニング効果を実証するためにラグビープレーヤーを対象として、トレーニングを実施し状況判断をテストによって評価した。トレーニング効果も認められ、状況判断を評価するためにプレーを言語化することも理解できた。さらに、状況判断の時間を考慮することで、スキル水準の違いを見ることができ、状況判断とスキル水準に関係があることがわかった。認知的トレーニング法を応用することについても、競技未経験者への授業中のトレーニングで一定の効果を見ることができた。

学位論文審査の結果の要旨

本論文に関し、調査委員から、認知的トレーニングによって認知のどの部分が向上するか、状況判断の評価基準の妥当性はあるのか、トレーニング対象者は妥当だったのかなどについて質問がなされたが、いずれも著者から満足（明確）な回答が得られた。

また、公聴会においても、多数の出席者があり、種々の質問がなされたが、いずれも著者の説明によって質問者の理解が得られた。

以上により、論文調査及び最終試験の結果に基づき、審査委員会において慎重に審査した結果、本論文が、博士（学術）の学位に十分値するものであると判断した。